

『源氏物語』における「搔く」と「弾く」

—音楽表現に着目して—

門 田 萌

一・はじめに

平安時代を生きる貴族にとって教養は大変重要なものであった。特に、和歌・書道・音楽の三つの教養は、平安貴族にとって必須のものであった。これについて中川正美氏は、自身の著書である『源氏物語と音楽』^(注1)において次のように述べておられる。

この道長は大井川に遊んだとき、川に 作文の舟、管絃の舟、和歌の舟の、三舟を浮かべてそれぞれの道に秀でた人に乗せて楽しんでゐる。大鏡によればこのとき藤原公任は道長にどの舟に乗るかと尋ねられ、和歌の舟を選んで秀歌を詠じたが、作文の舟に乗って漢詩を作ったほうが名声が一段とあがったのにと後悔したという。(中略) これらは公任や経信の多能ぶりを

伝える逸話であるが、王朝貴族にはこの三つの才が要求されたということであろう。

『源氏物語』は作中で七九五首の和歌が詠まれており、音楽に関連する記述が二百箇所以上見られ、まさに平安貴族の生活が描かれた作品だといえる。作者である紫式部も箏の琴の名手であるため、^(注2)そんな作者によって書かれた『源氏物語』は王朝文化を表する作品であるといえ、吉海直人氏は『源氏物語』について「日本音楽史上最大の資料集として有益である。」^(注3)と述べておられる。前述したように二百箇所以上存在する音楽に関連する記述は、その場面ごとに琴などの絃楽器や横笛などの管楽器の名称が見られ、当然それらを奏するための演奏行為を示す動詞も見られた。管楽器であれば「吹く」、打楽器であれば「打つ」などのように楽器と演奏行為の動詞は一つ

のセットになっている。しかし、絃楽器に関しては、それが「掻き鳴らす」のような「掻く」で表現されたものと「弾く」で表現されたものがある。

『源氏物語』は約一〇〇〇年頃に成立した平安中期の作品である。表1は、『源氏物語』と同時代の中古文学における「掻く」と「弾く」の用例数をまとめたものであり、その中でも『源氏物語』と『宇津保物語』が突出していることが明らかとなった。異なる動詞で一つものを表現するというのは他の楽器では見られなかった。あるものを対象とし、それを異なる言葉で表現する際にはそこに作者の意図が含まれているのだろうか。では、両者を使い分ける差異とは何なのだろうか。

表1 作品ごとの「掻く」「弾く」

	掻く	弾く
古今和歌集	5	0
竹取物語	1	0
伊勢物語	1	0
土佐日記	0	0
後撰和歌集	10	0
大和物語	10	0
平中物語	3	6
蜻蛉日記	17	3
宇津保物語	123	277
落窪物語	34	2
枕草子	25	9
和泉式部日記	5	0
源氏物語	229	102
紫式部日記	6	0
栄花物語	70	21
更級日記	9	2
夜の寝覚	60	32
狭衣物語	34	22
後拾遺和歌集	14	2
大鏡	14	5
金葉和歌集	7	4
詞花和歌集	5	0

本稿では、『源氏物語』における「掻く」と「弾く」の二語を中心に据え、二語の対象とするものや共起語などの観点から用例を比較、分析することを主な調査方法として、二語の差異を明らかにしていく。尚、本論における用例は全て、小学館の『日本古典文学全集』^(注6)からの本文を引用する。

二. 『源氏物語』における「掻く」について

「掻く」と「弾く」について考察していくうえでそれぞれの語の特性を知っておかなければならない。そのため、まずは『源氏物語』において「掻く」がどのように表現されているのか全体像を捉えておく必要がある。それをまとめたものが表2である。^(注7)

表2より、「掻く」は五九通りの表現がなされていることがわかる。また、「掻く」と表されているものは三例のみであり、残り二六例は全て複合語で表されていることが明らかとなった。最も多く見られるのは「掻き鳴らす」の三一例であり、ついで「掻き暗す」の二六例、「掻き合はす」の十八例となる。約九割が複合語で表さ

れる「搔く」であるが、ここで「搔く」はどのような意味を持つ語であるのかを確認するために、辞書上の意味を『古語大辞典』^(注8)より引用する。

かく【搔く】

① (手や道具で、水・土・岩石・草木などの類を) かき回す。かき出す。押し分ける。押しのける。また、土をすき返す。

② (体を) 搔く。ひっかく。

③ (髪の毛を指、または櫛で) かきやる。くしけずる。

④ (琴などの弦楽器の弦を) 爪ではじく。つま弾く。

⑤ ひっかくように物に取りつく。かじりつく。

⑥ (食物を口の中へ箸で) かき込む。

⑦ 刃物を手前の方へ引いて切る。かき取る。かき切る。

⑧ 招き寄せる。

辞書上の意味を確認すると「搔く」は、手や道具を用してかき回す、ひっかくという意味を持ち、「搔く」一語ではひっかくという意味合いが強いようである。この辞書では八つの意味を持つ「搔く」であるが、作中ではどのように使用されているのか、それを明らかにするために「搔く」の対象についてまとめたものが表3である。最も用例数の多い「搔き鳴らす」の対象は三一例全てが「音楽」を示し、同様に「搔き合はす」も十五例全て「音楽」を対象としている。名詞の「搔き合はせ」八例も全て「音楽」を対象としている。他に「音楽」を対象

表2 「搔く」の用例数

	用例数
搔き鳴らす	31
搔き暗す	26
搔き合はす	18
搔き乱る	11
搔き払ふ	10
搔き絶ゆ	9
搔き合はせ(名)	8
搔き抱く	8
搔き集む	7
搔き撫ぶ	7
搔き立つ	6
搔き遣る	6
搔き集む	5
搔き強く	4
搔き速ぬ	4
搔き潜む	3
搔き起こす	3
搔き返す	3
搔き崩す	3
搔き曇る	3
搔き垂る	3
搔く	3
すが搔き(名)	3
搔い翻ぶ	2
搔い放つ	2
搔き歩く	2
搔き続く	2
搔きつる	2
搔き紛る	2
搔き弄る	2
搔き渡す	2
すが搔く	2
搔い結す	1
搔い探る	1
搔い添ふ	1
搔い付く	1
搔い撫ぶ	1
搔い撫で(名)	1
搔い掃き(名)	1
搔い細る	1
搔い遣る	1
搔き合はす	1
搔き出だす	1
搔き出づ	1
搔き下ろす	1
搔き暗る	1
搔き消つ	1
搔き籠る	1
搔き探る	1
搔き付く	1
搔き纏ふ	1
搔き流す	1
搔き鳴す	1
搔き撫で(名)	1
搔き撫で纏ふ	1
搔き鳴らし合はす	1
搔き臥す	1
搔きます	1
搔き寄す	1
合計	229

表3 「掻く」の複合語とその対象

	音楽	人物	心	髪/毛	自然	思い出	生活	関係	気分	涙	動物	戸	その他	合計
掻き鳴らす	31													31
掻き暗す			17		7					1	1			26
掻き合はす	19													19
掻き乱る		1	4		1					5				11
掻き払ふ					1		7				2			10
掻き絶ゆ								9						9
掻き合はせ(名)	8													8
掻き掻く		7									1			8
掻き集む			2			4	1							7
掻き撫づ				5							2			7
掻き立つ	6													6
掻き遣る				5			1							6
掻き集む			2		1	2								5
掻き弾く	4													4
掻き進ぬ			1			3								4
掻き潜む		2					1							3
掻き起こす		3												3
掻き返す	3													3
掻き崩す						3								3
掻き曇る					2					1				3
掻き垂る					3									3
掻く		2		1										3
すが掻き(名)	3													3
掻き選ぶ	2													2
掻き放つ												2		2
掻き歩く		1		1										2
掻き続く						2								2
掻きつる		2												2
掻き紛る		2												2
掻き弄る	2													2
掻き渡す	2													2
すが掻く	2													2
掻き越す				1										1
掻き探る		1												1
掻き添ふ												1		1
掻き付く		1												1
掻き撫づ		1												1
掻き撫で(名)	1													1
掻き掃き(名)							1							1
掻き繕る		1												1
掻き遣る				1										1
掻き出だす				1										1
掻き出づ				1										1
掻き下ろす		1												1
掻き暗る					1									1
掻き消つ		1												1
掻き籠る		1												1
掻き探る				1										1
掻き付く												1		1
掻き繕ふ				1										1
掻き流す		1												1
掻き鳴す	1													1
掻き撫で(名)	1													1
掻き撫で繕ふ				1										1
掻き鳴らし合はす	1													1
掻き臥す		1												1
掻きます					1									1
掻き寄す							1							1
合計	86	29	26	19	17	14	12	9	6	4	3	3	1	229

とする複合語はいくつか見られるが、それらも全て「音楽」のみを対象とする結果となった。このとき「音楽」を対象とするもの以外で特定のものを対象とする用例は、「掻き絶ゆ」「掻き起こす」「掻き崩す」「掻き垂る」「掻い放つ」「掻き続く」「掻きつる」「掻き紛る」であり、「掻き絶ゆ」九例は「関係」を、「掻き起こす」三例は「人物」を、「掻き崩す」三例は「思い出」を、「掻き垂る」三例は「自然」を、「掻い放つ」二例は「戸」を、「掻き続く」二例は「思い出」を、「掻きつる」「掻き紛る」の二例はどちらも「人物」を対象としている。

尚、対象にばらつきがなく特定のものを示す複合語ということで、用例が一例のものも挙げると、他に二七例見受けられた。「掻き鳴らす」の次に用例数が多い「掻き暗す」は、二六例の中で「心」や「自然」、「気分」や「涙」などを対象にし、「掻き抱く」は八例中「人物」や「動物」を、「掻き集む(かきあつむ)」七例は「心」や「思い出」「生活」などを対象としている。以上のように特定のもののみを対象とする語もあれば、複数のものを対象とする語も見受けられた。これらの「掻く」対象や状態は共起する語により判別可能である。名詞によっ

て「掻く」対象を表し^(注9)、形容詞・形容動詞によって「掻く」の状態を表現している。^(注10)中には、共起語も見られない用例もあったが、その場合は最終的には文脈から「掻く」を読み解くことになる。「掻く」は、共起する語や文脈を通して物語の中で機能するといえる。

三 『源氏物語』における「弾く」について

次に、「弾く」に焦点を当てて考察を進めていく。まずは「掻く」と同様に『源氏物語』において「弾く」がどのように表現されているのか全体像を捉えておく必要がある。それをまとめたものが表4である。^(注11)

表4より、「弾く」は二四通りの表現がなされている

表4 「弾く」の用例数

	用例数
弾く	55
弾き取る	6
弾き物(名)	4
弾き合はす	3
弾き出づ	3
弾きさす	3
弾き伝ふ	3
弾きなす	3
弾き馴らす	3
弾き鳴らす	3
弾きすさぶ	2
弾き澄ます	2
弾き居る	1
弾き得	1
弾きこむ	1
弾き鎮む	1
弾きすぐる	1
弾き尽す	1
弾きとむ	1
弾き果つ	1
弾き弄る	1
弾きまぜ	1
弾き止む	1
爪弾き(名)	1
合計	102

ことが読み取れる。最も多いのが、五五例の「弾く」で、続いて「弾き取る」の六例、「弾き物」の四例、「弾き合はす」の三例となる。「弾く」という単語で表現されているものは、一〇二例あるうちの約五〇パーセントを占めており、残りの複合語については「弾く（単語）」で表現されているものほどの大差はない。「弾く」の辞書上の意味は、「指ではじいたり、爪ぐったりして音を立てる、鳴らす」である。^(注12) 複数の意味を持たないため、単語で意味が通ずるのである。「弾く（単語）」が突出している理由はここにあると推察される。

では、作中ではどのように使用されているのか、「弾く」の対象をまとめたものが表5である。最も用例数が多く見られるのは九五例ある「楽器」であり、これはさらに「和琴」などのように楽器名ごとに分類される。「楽器」の中で最も用例が多いのが二五例の「琴の琴」^(注13)であり、続いて二三例の「和琴」、二〇例の「箏の琴」となる。「琴の琴」が最も多いと表したが、「和琴」とは二例の差が見られるだけである。『源氏物語』において「和琴」は「琴の琴」と同率に重要視されているのである。「楽器」以外の用例数は残り一〇例で、「曲」や

表5 「弾く」の複合語とその対象^(注13)

	楽器						曲	奏法	その他	合計
	琴の琴	和琴	箏の琴	琵琶	琴	総称				
弾く	18	18	8	6		2	2			56
弾き取る	2		1		1			1	1	6
弾き物(名)		1		1			3			5
弾き合はす			1		1			1		3
弾き出づ		1		1			1			3
弾きさす	1		2							3
弾き伝ふ	1		1					1		3
弾きなす					1			1	1	3
弾き削らす		1	1		1					3
弾き鳴らす		1	2							3
弾きすさぶ	1		1							2
弾き澄ます	1		1							2
弾き居る				2						2
弾き得		1								1
弾きこむ			1							1
弾き鎮む				1						1
弾きすぐる				1						1
弾き尽す								1		1
弾きとむ	1									1
弾き果つ								1		1
弾き弄る			1							1
弾きます					1					1
弾き止む				1						1
爪弾き(名)				1						1
合計	25	23	20	14	7	6	8	1	1	105

「奏法」に分類してはいるが、これらもまた音楽に通ずるものである。つまり、「弾く」は単語においても複合語においても「音楽」を対象とする語であるということが明らかとなった。対象に着目したことにより、「弾く」が音楽を表現する語であることが明らかとなったが、その中でもさらに共起する動詞によって「弾く」場の状況を表現し、形容詞・形容動詞によって奏者の演奏の様子や音色を、^(注16)名詞によって何を演奏するのかなど、より具体的な情報を補足している。^(注17)「弾く」は単語で既に成立してしまっているため、多様な書き方の「掻く」とは異なり、判別することに重きを置いていない。そのため、表4のように「弾く(単語)」が突出し、複合語で大差が見られないことになるのだ。

四 「掻く」と「弾く」の複合語の比較

ここまで、「掻く」と「弾く」各語についてそれぞれ考察を進めてきた。ここからは、「掻く」と「弾く」の複合語の比較を行うことで差異を明らかにしていきたい。「掻く」と「弾く」について中川氏が「「掻く」は単独

では用いられず、「掻き鳴らす」のように複合して用いられ、「いささか」「ほのかに」を伴うことが多い。(中略)「掻く」には他にない、手の往復運動をいう「返す」「わたす」があつて、「置く」「試みる」^(注18)「始む」「果つ」などの演奏の最初と最後をいう語がない。」と述べられている。しかし、中川氏は「掻く」がなぜ単独で用いられないのか、手の往復運動を示す語は見られるが、演奏の最初と最後をいう語が見られないのはなぜか、理由までは述べておられず、考察の余地があると考え、ここでは、以上の点を解き明かすことも視野に含め考察をしていきたい。

まず、「掻く」と「弾く」の対象に着目すると音楽に関連するもののみが共通して見られるため、ここからは「音楽」を対象とする例を考察していく。比較を行うにあたり「掻く」と「弾く」の複合語についてまとめたものが表6である。「鳴らす」や「合はす」や「弄る」「鳴す」^(注19)を除いて「掻く」と「弾く」の後項の動詞に明確な違いが見られる。「掻く」が「立つ」「調ぶ」「返す」など音を出していることがわかる語が見られるのに対し、「弾く」は単語のみであったり、「馴らす」「澄ま

表6 音楽を対象とする複合語

	揺く	弾く
鳴らす	31	3
合はす	18	3
合はせ(名)	8	
立つ	6	
弾く	4	
返す	3	
すか(名)	3	
調ぶ	2	
形る	2	1
渡す	2	
すか	2	
撫で(名)	2	
合はす	1	
鳴す	1	3
鳴らし合はす	1	
弾く(単語)		55
取る		6
物(名)		4
出づ		3
さす		3
伝ふ		3
馴らす		3
すかさぶ		2
澄ます		2
屈る		1
得		1
こむ		1
鎮む		1
すぐる		1
尽す		1
とむ		1
果つ		1
ます		1
止む		1
爪(名)		1
合計	86	102

「す」など演奏に慣れていることや演奏の様子などを示す語が見られる。また、共通して見られる「鳴らす」「合はす」についても「揺く」三一例と「弾く」二例、十五例と三例など用例数にも差があることから、「揺く」が「鳴らす」「合はす」など後項の動詞によって意味の特定をしているということが明らかとなった。これは、既に二でも述べたように大本の意味として「ひっかく、かき回す」「揺く」の判別を、後項の動詞が補助しているからである。そして、「揺く」は音を出していることを示す、つまり音楽に関連する語であることを示すことが後項の動詞の役割としてある。これに対して「弾く」は、単語だけでも演奏する意味を表せるが、複合語における「弾く」の後項の動詞には対象をより具体的に表現する役割がある。つまり、後項の動詞の役割の違いに「揺

く」と「弾く」の差異があると推察される。

次に、中川氏の論にもあったように「揺く」は「いささか」「ほのかに」を伴うことが多いとあるため、形容詞・形容動詞の観点から比較を行うこととする。それを表にしたものが表7である。「揺く」と共起する形容詞・形容動詞は「おもしろし」が七例、「ほのかなり」が六例、「あはれなり」が四例と続き、「いささかなり」は見られなかった。反対に、「弾く」では、「をかし」が八例、「なつかし」が七例、「あはれなり」が五例と続き、むしろ「弾く」と共起する形容動詞に「いささかなり」が一例見られるという結果となった。「揺く」では六例見られた「ほのかなり」が「弾く」では見られず、ほかにも「少し」「多し」「はかなし」「はなやかなり」が二例ずつ見られた。

「揺く」に対して、「弾く」では見られない形容詞・形容動詞がある。反対に、「弾く」では三例見られた「上手なり」や「常なり」は「揺く」では見られず、前述した一例の「いささかなり」も当然含まれる。このように、形容詞や形容動詞の観点から「揺く」と「弾く」を考察すると、「揺く」では、「ほのかなり」「少し」

「はかなし」などのような形容語が用いられているこ

とから、しつかり音を出して演奏するというよりもはかない音で演奏するということがうかがえる。「弾く」では、「常なり」という形容動詞が用いられているところを見ると、日ごろからいつも演奏していることを、「上手なり」という形容動詞などによって演奏した音の感想が述べられる。このような「弾く」の形容詞や形容動詞に「いささかなり」が使用されていることに疑問が残る。実際の例で確認したい。

① 切に簾の内をそそのかしきこえたまへど、まして つつましきさし答へなれば、宮はただものをのみ あはれと思しつづけたるに、(中略)ただ末つ方

をいささか弾きたまふ。

①は、落葉の宮が想夫恋の終わりのほうを少し弾くという場面である。少しという点では、「掻く」のほうが適切のようであるが、本文に「末つ方」とあるように想夫恋という曲の終わりのほうを弾くという具体的なこと が示されており、また、この場面で落葉の宮は夕霧の言葉 に対して、否定の意を伝えるためにこの曲を弾いたと あるため、しつかりと音を出さなければ相手に伝わらな いことから「弾く」が使用されたと推察される。このこ とから、音は出さなければならぬが、はつきりすぎて

表7 音楽を対象とする形容詞・形容動詞

	掻く	弾く
おもしろし	7	3
ほのかなり	6	
あはれなり	4	5
をかし	3	8
少し	2	
いまめかし	2	1
多し	2	
なつかし	2	7
はかなし	2	
はなやかなり	2	
めづらし	2	4
なし	1	
もの清げなり	1	
をかしげなり	1	
あきらかなり	1	
あたらし	1	
あやし	1	
いぶせし	1	
うるはし	1	
奥深し	1	
おどろおどろし	1	
口惜し	1	
けにくし	1	
殊なり	1	
すごし	1	
すさまじ	1	
とりどりなり	1	1
賑はし	1	1
はやりかなり	1	1
めづらかなり	1	
ものあはれなり	1	
もの騒がし	1	
やはらかなり	1	
若し	1	
わりなし	1	
心すごし	2	
心やまし	1	1
上手なり		3
常なり		3
二なし		2
いささかなり		1
いみじ		1
うしろやすし		1
美し		1
事もなし		1
さままかなり		1
しどけなし		1
しめやかなり		1
並びなし		1
難し		1
優なり		1
ゆかし		1
ゆるるかなり		1
心にくし		1
心ことなり		1
合計	61	55

もいけないという場合に「いささかなり」が用いられるようである。

ここまで、「搔く」や「弾く」にそれぞれ特徴的な例をもとに考察を進めてきたが、ここからは両語に共通している「鳴らす」と「合はす」を複合語に持つ例を元に考察することで、「搔く」と「弾く」の差異についてさらに深く理解を進めていく。

「搔き鳴らす」

- ② 御前にいと人少なにて、うち休みわたれるに、独り目をさまして、枕をそばだてて四方の嵐を聞きたまふに、波ただここともに立ちくる心地して、涙落つともおほえぬに枕浮くばかりになりけり。琴をすこし搔き鳴らしたまへるが、我ながらいとすごう聞こゆれば

【源氏物語・須磨】

- ③ あはれにうち泣きて、言少ななるものから、さるべきふしの御答へなど浅からず聞こゆ。この常にゆかしがりたまふ物の音などさらに聞かせてたま

つらざりつるを、いみじう恨みたまふ。「さらば、形見にも忍ぶばかりの一事をだに」とのたまひて、京より持ておはしたりし琴の御琴取りに遣はして、心ことなる調べをほのかに搔き鳴らしたまへる、深き夜の澄めるはたとへん方なし。

【源氏物語・明石】

- ④ 風肌寒く、ものあはれなるにさそはれて、箏の琴をいとほのかに搔き鳴らしたまへるも奥深き声なるに、いとど心とまりはてて、なかなか思ほゆれば、

【源氏物語・横笛】

- ②は、須磨へと流離され、そこでは秋風が寂しく吹き、それが心にしみるというような生活を送っている源氏が、そんな生活のなかである夜もの悲しく琴を少し搔き鳴らしたという場面。③は、いよいよ源氏が須磨から出立する日が明後日ぐらいになったとき、源氏と明石の君が琴を弾き、別れを惜しんでいる場面である。④は、肌寒くしみじみとした区分に誘われて演奏する場面である。

「掻き鳴らす」の用例を見てみると、③のように出立近くでの演奏など時間があまりないときに使用される。また、②のような心情をのせるときや、その場の雰囲気心に心が動かされるときなど気持ちの籠る時に「掻き鳴らす」は用いられる。

「弾き鳴らす」

⑤ 音もいと二なう出づる琴どもを、いとなつかしう弾き鳴らしたるも、御心とまりて、「これは、女のなつかしきさまにてしどけなう弾きたるこそをかしけれ」とおほかたにのたまふを、

【源氏物語・明石】

⑥ 近き几帳の紐に、箏の琴のひき鳴らされたるも、けはひしどけなく、うちとけながら掻きまさざぐりけるほど見えてをかしければ、「この聞きならしたる琴をさへや」などよろづにのたまふ。

【源氏物語・明石】

⑤は、初夏の月夜にて源氏と入道が御琴を弾いている

場面である。⑥は、源氏が明石の君と出会う場面であり、明石の君がくつろいだ様子で手慰みに箏の琴を弾いていたことがうかがえることを説明したものである。⑤⑥の用例を見ると、「弾き鳴らす」ときは、「時間に急かされる」「掻き鳴らす」とは違い、くつろいだ様子で演奏する際に用いられる。⑤は会話の中での演奏であり、⑥は「うちとけながら」という語が使用されていることから明らかである。また、「弾き鳴らす」は「掻き鳴らす」のように感情にまかせてというよりも、「なつかし」という語から伝授された通りに演奏し、また、人物ではなく几帳の紐によって鳴らされたという点からも客観的な状態で用いられる語であることがうかがえる。

「掻き合わす」

⑦ 箏の琴のあるを引き寄せて、かの明石にて小夜更けたりし音も、例の思し出でらるれば、琵琶をわりなくせめたまへば、すこし掻き合はせたる、いかでかうのみひき具しけむと思さる。

【源氏物語・薄雲】

⑧ おほかたの花の木どももみなけしきばみ、霞みわたりにけり。「月たたば、御いそぎ近く、もの騒がしからむに、掻き合はせたまはむ御琴の音も、試楽めきて人言ひなさむを、このごろ静かなるほどに試みたまへ」とて、寝殿に渡したてまつりたまふ。

【源氏物語・若菜下】

⑦は、明石の君が束の間の逢瀬において源氏が演奏する箏の琴に琵琶を合わせ、合奏している場面。⑧は、正月の女楽に関する表現で、月が変われば準備で忙しくなるため、落ち着いて合奏する練習も出来ず、静かなところできるようにと源氏から紫の上が言われている場面である。

「掻き合はす」の用例では、⑦のように束の間の逢瀬中で合奏し、⑧のように準備で忙しい中での演奏で用いられる語であることがうかがえる。どちらも限られた時間の中での演奏であるため、やはり時間と関連性を持つのが「掻く」の特徴であることが明らかである。

「弾き合はす」

⑨ さすがに物の音めづる阿闍梨にて、「げに、はた、この姫君たちの琴弾き合はせて遊びたまへる、川波に競ひて聞こえはべるは、いとおもしろく、極楽思ひやられはべるや」と古代にめづれば、

【源氏物語・橋姫】

⑩ いとど、人のけはひも絶えてあはれなる空のけしき、所のさまに、わざとなき御遊びの心に入りてをかしうおほゆれど、うちとけてもいかでかは弾き合はせたまはむ。

【源氏物語・椎本】

⑪ はやりかなる曲物など教へて、師と、をかしき夕暮などに、弾き合はせて遊ぶ時は、涙もつつまず、をこがましきまでさすがにものめでしたり。

【源氏物語・東屋】

⑨は、大君と中の君が御琴を合奏して遊んでいる場面である。⑩は、薫が大君と中の君に風情に合わせて演奏

するよう促したが、思慮深い態度で演奏をしないと
場面である。⑪は、琵琶の師匠より教えてもらった楽曲
を風情ある夕暮に合わせて常陸介の娘が師匠とともに演
奏するという場面である。

「弾き合はす」の用例を見ると、貴族の遊びの場面や
教養の場面で用いられていることがわかる。⑨⑩⑪には
「遊ぶ」や「御遊び」の語が見られることから明らかに
であろう。⑨では、貴族の遊びとしての演奏を、⑩では、
演奏することを促されても理性的な態度で対応する様子
が、⑪では、教えてもらった楽曲通りに演奏し遊ぶ様子
が表現されていることから、「弾き合はす」という語は
「掻き合はす」の時間との関連性というよりも、風情や
教養との関連性を持つのが「弾く」の特徴であることが
明らかとなった。

ここまで、「掻く」と「弾く」の差異について考察を
進めてきた。そして、本論では中川氏の論を元により理
解を深めようと論を展開してきた。中川氏は「掻く」と
「弾く」の差異について「すると」「掻く」は瞬間的な
動作をいい、「弾く」は演奏することをいうのである。
この二語がみえるときは、まず「掻き鳴らし」、つい

で「弾く」のであって逆の順になることはない。」と述
べておられるが、ここまで考察を進めてきた結果、「掻
く」は単に瞬間的な動作をいう語ではなく、

- ・ 大本の意味であるひっかく、かき回すという意味を
含みながらも後項の動詞によつて判別をする
- ・ 共起する形容詞や形容動詞は、「掻く」がどのよう
な状態であるのかを表現する
- ・ 共起する名詞は、「掻く」対象を表現する
- ・ 感情にまかせて演奏する主観的な動詞
- ・ 限られた時の中で演奏をするという時間と関連性を
持つ

以上の特徴を持つ語であることが明らかとなった。そ
して、「弾く」は演奏することをいうだけではなく、
・ 一語のみで音楽に通ずる意味を持つ語であるが、後
項の動詞によりその演奏状態に具体性を表す
・ 共起する動詞は、場の状況を表現する
・ 共起する形容詞や形容動詞は、演奏の様子や音色を
表現する
・ 共起する名詞は、何を演奏するかなどのより具体的
な情報を補足する

・楽曲通りに演奏をし、貴族の遊びや風情に合わせて演奏するという客観的な状態で用いられる

以上の特徴を持つ語であることが明らかとなった。つまり、「掻く」と「弾く」の差異は複合語で成立する語と単語で成立してしまう語という点、共起語により判別する語と共起語により具体性を持つ語という点、音楽表現に着目すれば、主観的か客観的か、時間に縛られているか否か、風情や教養に関連するか否かという所にある。

五. 『源氏物語』と『宇津保物語』の「掻く」と「弾く」の比較から

『源氏物語』『宇津保物語』二つの作品を比較するにあたり抑えておきたいのは、中川氏が「紫式部は音楽を自身の構想する物語に入れるにあたって、宇津保物語の音楽について、つぶさに精査をくりかえし検討してわが物語について思いめぐらせたことであろう」と述べておられることである。以下『源氏物語』は『宇津保物語』の影響を受けた作品であることを踏まえたくうえで、二つの作品を比較し考察していきたい。

「掻く」と「弾く」の対象に着目すると共通してゐるのは「音楽」であるため、ここからは「音楽」を対象とした用例を元に考察していく。比較を行うにあたり両物語の「掻く」と「弾く」の複合語に着目していく。『宇津保物語』の複合語についてまとめたものが表8である。既に表化した『源氏物語』については表6を参照する。表8より、「鳴らす」「合はす」「立つ」「鳴す」を除いて「掻く」と「弾く」の後項の動詞に明確な違いが見られる。「掻く」が「弾く」「出づ」など音を出していることが明確にわかる語が見られることに對し、「弾く」は単語のみでも成立し、「取る」「留む」「習ふ」など演奏したものをどうするかを示す語が見られる。そして、共通して見られる「鳴らす」や「合はす」「立つ」についても、「掻く」三八例と「弾く」六例、二四例と一二

表8 音楽を対象とする複合語

	掻く	弾く
鳴らす	38	6
合はす	24	12
立つ	5	2
弾く	5	
抱く	1	
出づ	1	
合はせ(名)	1	
返す	1	
返る		
鳴らす	1	1
弾く(単語)		208
取る		9
物(名)		5
遊ぶ		4
止む		4
さす		3
留む		3
弾きに弾く		2
始む		2
果つ		2
居る		2
移す		1
置く		1
かかると		1
試みる		1
添ふ		1
尽す		1
馴らす		1
習ふ		1
勝る		1
見る		1
合計	78	275

例、五例と二例というように用例数にも差があり、これらの動詞は「掻く」が重要視していることが明らかである。「掻く」が「鳴らす」「合はす」「立つ」を重要視しているのは、これらの語によって音を出していることを明確に表し、それによって「掻く」が演奏していることを示しているのである。

以上を踏まえた上で『源氏物語』との「掻く」の複合語を比較したものが図1である。共通部分には「鳴ら

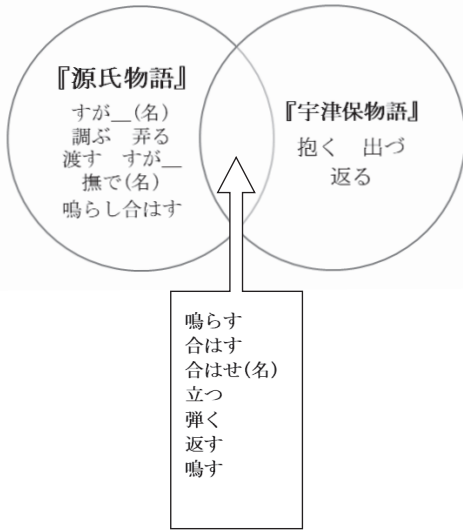


図1 音楽を対象とする「掻く」の複合語

す」「合はす」「立つ」など音を出し演奏していることを明確化する語が見られる。『源氏物語』では八例ある「合はせ(名)」が『宇津保物語』では一例しか見られないのは、調律するための小曲よりも演奏することを重要視しているからだと推察される。共通しない部分では、『宇津保物語』が「出づ」「返る」のように音を出して演奏していることを表すのに対し『源氏物語』では、「調ぶ」という調律を表現する語や、「弄る」「渡す」など動作によっても演奏していることを表していることがわかるであろう。

続いて、『源氏物語』と『宇津保物語』の「弾く」の複合語を比較していく。それを図化したものが図2である。共通部分には「弾く(単語)」「物(名)」が見られ、また、「取る」や「さす」「馴らす」など演奏の様子を示す語が見られた。共通しない部分には「宇津保物語」は「遊ぶ」「留む」「試みる」のように演奏するときの状況を表す語が見られ、また、「移す」「置く」なども見られた。これに対し、『源氏物語』では「すさぶ」「鎮む」のように奏者の心情を背後にする語や、「澄ます」など音色の様子を表す語が見られた。

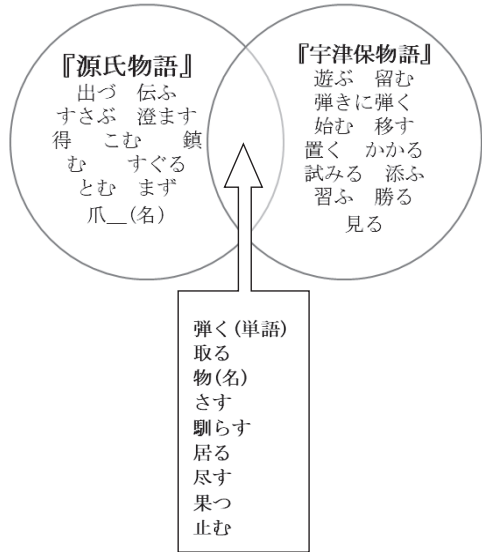


図2 音楽を対象とする「弾く」の複合語

複合語に着目して考察してきたが、「掻く」と「弾く」の差異は、『宇津保物語』の場合は、「掻く」では後項の動詞は音を出していることを表す語が見られ、これにより演奏していることを明確化する役割を担う。「弾く」では後項の動詞が演奏時の状況を示す役割を担っているといえる。これに対し『源氏物語』の場合は、「掻く」では後項の動詞は音を出す語に加え、動作を表す語が見られ、これにより演奏していることを示す役割を担う。

「弾く」では心情に関連する語や音色の様子を表す語が見られ、後項の動詞により演奏時の奏者の心情や音色の様子をも含み表す役割を担っていることが明らかとなった。この点が両語の差異だといえる。

次に、共起語の形容詞・形容動詞に着目して考察を進めていく。『宇津保物語』における「音楽」を対象とした語の共起語は表9にまとめた。『源氏物語』については既出のため、表7を参照する。表9より、「いささかなり」「おもしろし」をはじめ十一語の共通の語を除き、「弾く」の形容詞・形容動詞には違いが見られた。「掻く」は「ほのかなり」という演奏時の程度を示す語や「あやし」「戯れなり」という演奏時の様子を示す語が見られるのに対し、「弾く」は「上手なり」「あはれなり」「愛し」のように演奏する音色の感想を示す語が見られた。

以上を踏まえた上で『源氏物語』との「掻く」の共起語(形容詞・形容動詞)を比較したものが図3である。共通部分には「ほのかなり」「少し」「多し」など演奏の程度を表す語が見られ、また、「おもしろし」「をかし」「あやし」などの演奏の様子を表す

表9 音楽を対象とする共起語（形容詞・形容動詞）

	掻く	弾く
いささかなり	7	1
おもしろし	6	11
ほのかなり	5	
同じ	4	6
少し	3	4
あやし	2	
多し	1	3
ある限りなり	1	
いみじ	1	1
理なり	1	
高し	1	2
戯れなり	1	
小さし	1	1
つれづれなり	1	
何心なし	1	
はつかなり	1	
久し	1	1
めでたし	1	1
をかし	1	1
惜し	1	
上手なり		6
あはれなり		5
限りなし		5
かじこし		4
愛し		3
大きなり		2
おどろおどろし		2
騒がし		2
静かなり		2
なし		2
等し		2
らうらうじ		2
明らかなり		1
荒し		1
美し		1
美しげなり		1
穢し		1
うらやまし		1
うるはし		1
おとなおとなし		1
口惜し		1
苦し		1
恋し		1
心もとなし		1
異なり		1
聡し		1
さまざまなり		1
忍びやかなり		1
しめやかなり		1
切なり		1
たぐひなし		1
常なり		1
福まし		1
恥づかし		1
はなやかなり		1
まさりざまなり		1
密かなり		1
めづらかなり		1
めづらし		1
疾し		1
ゆかし		1
ゆゆし		1
らうがはし		1
わづらはし		1
合計	41	101

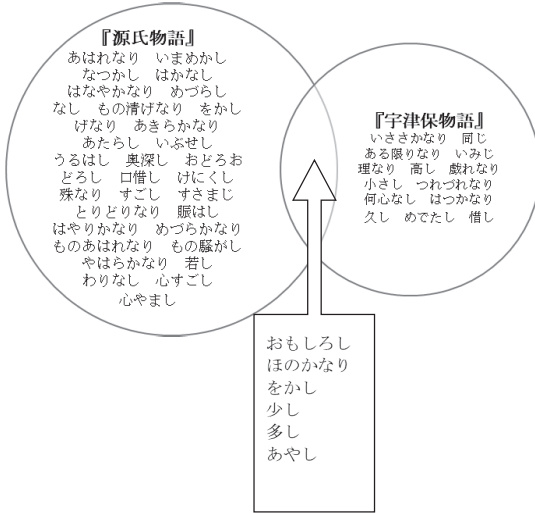


図3 音楽を対象とする「掻く」の共起語（形容詞・形容動詞）

語が見られた。共通しない部分には『宇津保物語』は「いささかなり」という程度を表す語や、「同じ」「理なり」など様式を表す語、「高し」のように演奏した音色を表す語が見られた。これに対し『源氏物語』では「はかなし」「口惜し」「心すごし」などのように演奏時の心情を表す語や、「あはれなり」「をかしげなり」「もの清げなり」のように演奏するときの様子を表す語などが見られた。『宇津保物語』では様式や演奏した音色を表し、『源氏物語』では心情や演奏の様子を表していることが明らかとなった。

続いて、『源氏物語』と『宇津保物語』の「弾く」の共起語（形容詞・形容動詞）を比較していく。それを図化したものが図4である。共通部分には「おもしろし」「あはれなり」「をかし」「上手なり」のように演奏した

様子を表す語が見られ、また、「常なり」「美し」「しめやかなり」という状態を表す語が見られた。共通しない部分には『宇津保物語』は「少し」や「多し」「静かなり」「おとなおとなし」のように程度を表す語が見られ、また、「同じ」のように様式を表す語も見られた。これに対し、『源氏物語』では「二なし」「並びなし」のように音色の状態を表す語や、「ゆるるかなり」「はやりかなり」のように音色の様子を表す語が見られた。『宇津保

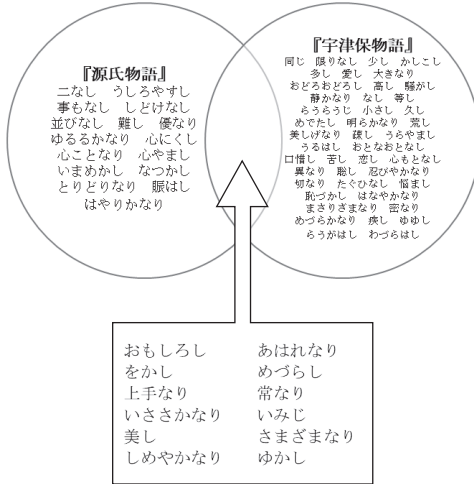


図4 音楽を対象とする「弾く」の共起語
(形容詞・形容動詞)

物語』では「弾く」でもまた程度や様式を表し、『源氏物語』では音色の状態や様子を表していることが明らかとなった。

共起語の形容詞・形容動詞に着目して考察してきたが、「掻く」と「弾く」の差異は、『宇津保物語』の場合は、「掻く」程度や、「掻く」ものの様式や演奏した音色を表し、『源氏物語』では演奏そのものというよりも奏者の心情や様子、音色の状態や様子を表すという演奏の周辺について補足しているといえ、この点が「掻く」と「弾く」の差異だといえる。

最後に、共起語の名詞について着目して考察を進めていく。『源氏物語』と『宇津保物語』における「音楽」を対象とした語の共起語は表10、表11にまとめた。表10より、「琴の琴」「調べ」「箏の琴」をはじめ十六語の共通の語を除き、「弾く」の名詞には違いが見られた。名詞においては「掻く」「弾く」どちらにも楽器名が見られるが、「掻く」は「盤渉調」や「黄鐘調」など「掻く」ための調子を表す語や「物の声」「虫の声」等演奏に合わせるものを示す語、「御いそぎ」という限定された時間を表す語が見られた。これに対し、「弾く」は「物」や「手」

「人」のように「弾く」ことをする対象を説明する語や「掻き合はせ」「広陵」「想夫恋」など演奏する曲を表す語も見られた。

続いて、『源氏物語』と『宇津保物語』の「掻く」の

共起語（名詞）を比較していく。それを図化したものが図5である。共通部分には「琴の琴」や「琴の琴」「和琴」「琵琶」のように演奏する楽器を表す語が見られ、また、「声」や「音」のように音色を表す語も見られた。共

表10 『源氏物語』における共起語（名詞）

	掻く	弾く
琴の琴	9	8
調べ	7	4
箏の琴	7	7
物の音	7	1
御琴（ども）	5	11
和琴（あづま）	5	7
音	4	3
爪音	3	2
律	3	2
琵琶	3	9
琴の音	3	1
声（々）	3	
物	3	7
盤渉調	2	
あづま（調子）	2	
すが掻き	2	
黄鐘調	2	
撥の音	2	
響き	2	
をりをり	2	
よろづ	2	
安名尊	1	
秋風楽	1	
手	1	11
平調	1	
物の声	1	
虫の声	1	
御気色	1	1
心やり	1	
人	1	2
みな	1	
世の常	1	
一つ	1	4
御いそぎ	1	
春	1	
他人	1	
わざ	1	
もののおはれ	1	
かたはし	1	
掻き合はせ		5
曲物		2
吹物		2
管絃調		1
広陵		1
ねたき音		1
嬉喜の御手		1
五箇の調べ		1
五六の撥		1
想夫恋		1
一つ、二つ		1
三代		1
吉き人		1
女		1
御遊び		2
御事		1
祭		1
御獅子		1
時		1
すきずきしき		1
留		1
はじめつ方		1
未つ方		1
一の才		1
御中		1
言葉		1
合計	96	113

表11 『宇津保物語』における共起語（名詞）

	掻く	弾く
御琴（ども）	14	42
物の音	9	2
琵琶	6	12
声	6	11
箏の琴	5	6
琴の琴	5	26
琴の音	3	6
手	3	30
音	3	9
一声	3	1
歌	2	1
物の声	2	
時	2	4
一つ	2	9
物	2	3
様	2	2
三つ	1	
むかし	1	3
手づかひ	1	
楽の声	1	1
和琴	1	1
鼓	1	1
物の笛	1	
弾き物	1	
大和歌	1	
胡笳の手	1	1
胡笳の声	1	1
譜	1	
ゆいこくの曲	1	
せた風	1	1
万歳楽	1	
一の破	1	
小調	1	
二の拍	1	
はし風	1	1
椿	1	1
調べ	1	5
響き	1	2
一度	1	
よろづ	1	2
前	1	
位	1	
限り	1	6
事	1	7
人		13
曲の物		4
ほそを風		4
楽		3
なん風		3
りうかく風		3
一つづつ		3
ところ		3
秋		2
末の世		2
二ところ		2
三ところ		2
琴の声		2
みやこ風		2
吹き物		2
大曲		2
曲		2
年ごろ		2
思ふやう		2
権兒		2
母君		1
心		1
夜昼		1
乱声		1

笛		1
一手		1
五・六帖		1
衆器ども		1
ゆいこくの手		1
曲の手		1
大和琴		1
緒あるもの		1
糸観べ		1
はうしやう		1
果ての音		1
胡笳の調べ		1
一筋		1
年月		1
七日七夜		1
夜		1
乱り心地		1
思ひ		1
思ひのもの		1
者		1
清涼殿		1
渡殿		1
一、二		1
一度		1
四つ（歳）		1
二つ三つ		1
七つ（歳）		1
異		1
極楽浄土		1
みな		1
世		1
遊び		1
御ほど		1
姿		1
合計	97	295

通しない部分では「宇津保物語」は、「鼓」「弾き物」など演奏外の楽器を表す語が見られ、また、「手づかひ」のように演奏する具体的な数字を示す語も見られた。これに対し、『源氏物語』では「爪音」「撥の音」のように正式名称でなくとも演奏している楽器の音を表す語が見られ、「盤渉調」や「黄鐘調」「平調」のように調子合わせを表す語も見られた。『宇津保物語』では具体的な

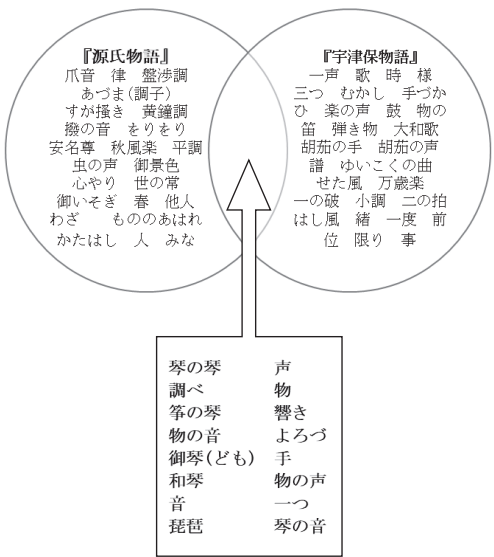


図5 音楽を対象とする「掻く」の共起語（名詞）

楽器の名称や技術を表す語によって「掻く」に具体性を持たせ、演奏時の具体的な数字によって「掻く」ことを規定していると推察される。『源氏物語』では楽器の名称は必ずしも明記される訳ではなく、「爪音」や「撥」など関連する語によって楽器を特定するに至ることもあり、具体的な曲を演奏することよりも調子合わせの曲を「掻く」など、演奏することをあまり重要視していないといえる。

続いて、『源氏物語』と『宇津保物語』の「弾く」の共起語（名詞）を比較していく。そして図化したものが図6である。共通部分には「琴の琴」「箏の琴」など演奏する楽器を表す語が見られ、共通しない部分には『宇津保物語』は「はし風」や「せた風」「りうかく風」のように「琴の琴」をさらに個別化する語が見られ、『源氏物語』ではこれらの名称が見られないことから『宇津保物語』は楽器の中でも「琴の琴」が重要であるといえる。他にも「糸競べ」という語が見られるが、これにより演奏する技術を表現し、また、「奏法」が見られたり、「習ふ」という奏法を伝授する語が見られたことから『宇津保物語』では伝授されたものを「弾く」こと

が重要視されているといえる。対して『源氏物語』では「律」や「掻き合はせ」のように具体的に何かを「弾く」ことよりも、演奏することを軽く捉え、気分転換に少し「弾く」、心情を込めて「弾く」ということを表している。

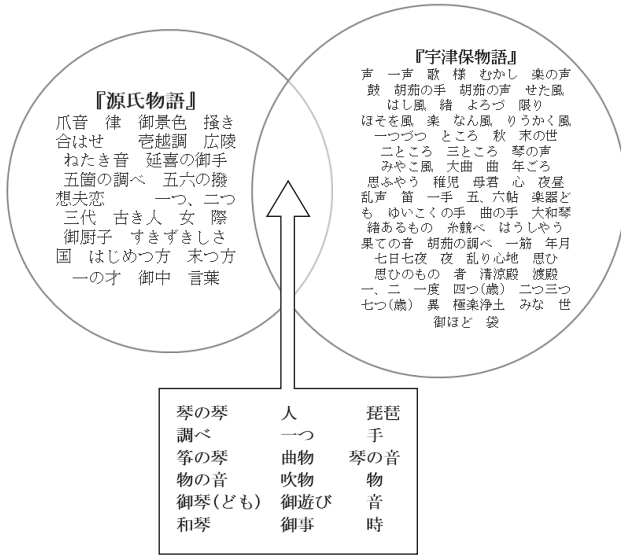


図6 音楽を対象とする「弾く」の共起語（名詞）

共起語の名詞に着目して考察してきたが、「掻く」と「弾く」の差異は、『宇津保物語』の場合は、具体的な楽器の名称が見られ、「掻く」ことに具体性持たせ、演奏に伴う数詞によって「掻く」ことを規定する。「弾く」は、演奏することを重要視しているため演奏技術や奏法の伝授を表す語が見られる。対して『源氏物語』では楽器も必ずしも明記されるわけではなく、決められたことよりも気ままに調子あわせの曲を弾くなど奏者の自由度が高いといえる。数詞や奏法など〈演奏〉というものに拘束される「弾く」、「弾く」ほど楽器にも縛られず、心情にまかせて演奏する自由度の高い「掻く」表現に二語の相違があらわれている。

ここまで複合語、共起語という点から『宇津保物語』『源氏物語』の「掻く」と「弾く」について考察を進めてきたが、両作品の「掻く」と「弾く」の分析結果をまとめると、次の通りである。『宇津保物語』における「掻く」の後項の動詞には音を出していることを表す語が見られ、これにより演奏していることを明確化しており、楽器によって「掻く」ことを具体化させる。しかし、複合語や共起語などが様々な情報を補足し、その中でし

か成立しない。「弾く」は、後項の動詞が演奏時の様子や状況を示す。単語でも成立するからこそ演奏自体が重要視される。

『源氏物語』における「掻く」の後項の動詞は音を出す語に加え、動作を表す語が見られ、これにより演奏の際の心情や演奏の様子をも含み表す。「弾く」では、心情に関連する語や音色の様子を表す語が見られ、後項の動詞により演奏時の奏者の心情や音色の様子を示す。『源氏物語』では演奏そのものというよりも奏者の心情や様子、音色の状態や様子を表すという演奏の周辺について補足しているといえる。

六、終わりに

本稿により明らかになった点を以下に述べる。まず、「掻く」は多岐にわたる意味用法を有しており、単語のままでは意味判別が不可能である。用例数を提示した際に複合語が多く見られたのは、「掻く」が後項に動詞を伴うことで意味を特定限定し物語の中で機能するためであ

ると考えられる。しかし、複合語だけでは意味が、特定限定できず、共起語によって「掻く」の意味判別の確証を得るといえる。共起する名詞によって「掻く」対象を表し、形容詞・形容動詞によって「掻く」の状態を表現する。共起語によって「掻く」を修飾し、「掻く」を判別することが可能となるのである。中には共起語が見られない場合もあり、前後の文脈から読み解くことにもなる。「掻く」は、周辺の語や文脈との関係において物語の中で機能し始める。

「弾く」は複数の意味を持たないため、単語のみで成立する語である。しかし、共起する動詞によって「弾く」場の状況を表現し、形容詞・形容動詞によって奏者の演奏の様子や音色を、名詞によって何を演奏するのかなど、より具体的な情報を補足していることが明らかとなった。「弾く」は単語で既に成立しているため、判別することに重きを置いていない。そのため、用例数では「弾く(単語)」が突出し、複合語で大差が見られないことになる。「弾く」が単語で用いられるのは、演奏することを明確に表現するときである。それが過去のことで

あるうと演奏したことが重要なのである。一方、複合語が用いられるとき、単に「弾く」だけではなく、演奏した結果どうなったか、また対象を具体的に表現する働きをすることが明らかとなった。

つまり、「搔く」と「弾く」の差異は複合語で成立する語と単語で成立する語という点、共起語により判別する語と共起語により具体性を持つ語という点、音楽表現に着目すれば、主観的か客観的か、時間の制限を伴うか否か、手法や技能に関連するか否かにあるといえる。

『宇津保物語』との比較においては、次のような事柄が明確になった。『宇津保物語』では具体的な楽器の名称が見られ、「搔く」ことに具体性持たせ、演奏に伴う数詞によって「搔く」ことを限定している。「弾く」は、演奏することを重要視しているため演奏技術や奏法の伝授を表す語が見られる。対して『源氏物語』では楽器も必ずしも明記されるわけではなく、決められたことよりも気ままに調子あわせの曲を弾くなど奏者の自由度が高いといえる。数詞や奏法など \langle 演奏 \rangle というものに拘束される「弾く」、「搔く」ほど楽器にも縛られず、心情にまかせて演奏する自由度の高い「搔く」、以上が

「搔く」と「弾く」の差異であると考えられる。このような中で、「弾く」が演奏することを重要視している点は、『宇津保物語』から『源氏物語』へと受け継がれてきたものであるといえる。

本稿では、「搔く」と「弾く」の差異を音楽表現を中心に据えて考察してきた。しかし、『源氏物語』の表現は多岐に渡り、音楽に関連する動詞は「遊ぶ」^(註2)「調ぶ」などもみられる。今回は考察することが叶わなかったが、「遊ぶ」「調ぶ」との関わりも踏まえることが出来ればより一層『源氏物語』の音楽表現の把握が可能となるだろう。

(注記)

(注1) 中川正美『源氏物語と音楽』(和泉書院 二〇〇七年)より。

(注2) 清水好子「源氏物語と音楽」『國文學』 関西大学国文学会 一九九二年)より。

(注3) 吉海直人「源氏物語表現・発想事典 音楽」(『別冊國文學・源氏物語事典』) 學燈社 一九八九年)より。

(注4) 「年表資料 中古文学史」(笠間書院 一九七三年)を参考にした。

(注5) 表1における用例数は以下の資料を参考にした。

『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院 二〇一四年)
 『日本古典対照分類語彙表』に掲載されていないなかった
 作品においては、以下の資料を参考した。

『歌物語 伊勢物語・平中物語・大和物語 総合語彙
 索引』(勉誠社 一九九四年)

『落窪物語総索引』(明治書院 一九六七年)

『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日
 記・紫式部日記・更級日記 総合語彙索引』(索引
 篇)』(勉誠社 一九九六年)

『栄花物語 本文と索引 自立語索引篇』(武蔵野書院
 一九八五年)

『後拾遺和歌集総索引』(清文堂 一九七六年)

『金葉和歌集総索引』(清文堂 一九七六年)

『詞花和歌集総索引』(和泉書院 一九八九年)

(注6) 『新編日本古典文学全集 源氏物語①』⑥(小学館
 一九九七年)より。

(注7) 用例数は注5とともに以下の資料を参考にした。

『新日本古典文学大系 別巻 源氏物語索引』(岩波書
 店 一九九九年)

『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』(勉誠社
 一九九四年)

尚、用例数の基本としたのは『日本古典対照分類語彙

表』である。用例数に差異が見受けられるのは、用例
 検索をする際に用いた索引の漏れを他の索引から補足
 し、また、「掻く」ではなく「書く」などと表記が揺れ
 ているものは含めなかったからである。

(注8) 中田祝夫編『古語大辞典』(小学館 一九八三年)より。

(注9) 「掻く」と共起する名詞は一一五語あり、見出しで分
 類すれば、「音楽」三二パーセント、「気持ち」一一

パーセント、「自然」九パーセント、「髪の毛」七パー
 セント、「時間」七パーセント、「生活」五パーセント、
 「建物」二パーセント、「その他」二八パーセントの計
 八項目からなる。尚、パーセント表示については各項
 目ごとに全体に対しての割合を示している。「掻き暗
 す」を例としてみると前件後件ともに何が掻き暗して
 いるのかを表現する「心地」などの名詞が見られた。

(注10)

「あはれなり」「おもしろし」「ほのかなり」などを
 はじめとした語が見られ、また、一・二例と数的には
 少ないが「心すごし」や「心憂し」など心に関連する
 語も見られた。「掻き鳴らす」を例としてみると、前
 件において「ほのかなり」や「少し」など「掻き鳴ら
 す」ときの程度がうかがえ、後件では「あはれなり」
 や「をかし」「心すごし」など様子がどうであったの
 か、どのような音色であったのかを表現する語が見ら

れた。

(注11) 表4における用例数は注5の資料を参考にした。尚、用例数の基本としたのは『日本古典対照分類語彙表』である。用例数に差異が見受けられるのは、基本とした索引の漏れを他の索引から補足し、また、「弾く」ではなく「引く」などと表記が揺れているものは含まなかったからである。

(注12) ※注8と同様。

(注13) 一つの語で複数を対象としている用例があり、数が重複している。

(注14) 「琴(こと)」表記と「琴(きん)」の表記を区別するために、この論文中では、「こと」を「御琴」とし、「きん」は「琴の琴」と表記をする。

(注15) 当該二の、「掻く」の共起語として動詞を含めなかったのは、「弾く」と同様に「たまふ」が最も多い用例数であったが、それ以外の動詞に差が見られず、考察の必要がなかったためである。「弾く」と共起する動詞は三四語あり、「たまふ」が五八例と最も多く見られ、次いで「遊ぶ」の五例となり、突出しているのは「たまふ」のみで他は大差が見られなかった。敬語表現に着目すれば「奉る」「侍る」が見られ「たまふ」ほどの大差は見られないとしても、敬語表現が多数共起する語の中に含まれるのは『源氏物語』が平安貴族を題材

とした作品であるからだとと言える。また、「遊ぶ」という語が「たまふ」に次いだのは、貴族の教養として音楽は重要なものであり、管絃の遊びがたびたび開催されることから、音楽に通ずる語である「弾く」と共起する動詞として見られたと推察した。

(注16) 「弾く」と共起する形容詞・形容動詞は二九語あり、「をかし」「なつかし」「あはれなり」などをはじめとした語が見られた。「弾く」を例とすると前件で「あはれなり」「しどけなし」「しめやかなり」のように演奏するときの奏者の様子が、後件では演奏した音色について表現されている。

(注17) 「弾く」と共起する名詞は四二語あり、分野にすれば「音楽」「数詞」「人物」「その他」の四項目からなる。「琵琶」「箏の琴」など楽器名などが見られる中、「弾く」を例とすると前件で楽器の名詞が見られ、全体においても名詞が前件に集中する結果となった。

(注18) 注1と同様。

(注19) 「掻きなす」「弾きなす」の表記は、『日本古典対照分類語彙表』や索引を参考にし、「鳴す」と表記する。

(注20) 『新編日本古典文学全集 源氏物語④』(小学館一九九六年)三五五頁、注二四より。

(注21) 注1と同様。

(注22) 注1と同様。

(注23) 『源氏物語』において「琴」の次に注目されるのは「横笛」である。「横笛」は「琴」とも合奏する用例が見られる。「琴」の次に重要な「横笛」であるが、その演奏動詞には「吹く」が見られる。「吹く」の対象は「音楽」だけでなく「風」を表す語としても用いられる。「吹く」は全体で一七一例見られ、そのうち「音楽」に関するものは五三例である。しかし、「吹く」のみではなく、この語もまた複合語が見られる。

(参考文献)

- ・『日本古典対照分類語彙表』(笠間書院 二〇一四年)
- ・『新日本古典文学大系 別巻 源氏物語索引』(岩波書店 一九九九年)
- ・『源氏物語語彙用例総索引 自立語篇』(勉誠社 一九九四年)
- ・『新編日本文学全集 源氏物語①～⑥』(小学館 一九九七年)
- ・『宇津保物語…本文と索引 索引編』(笠間書院 一九七五年)
- ・『宇津保物語…本文と索引 本文編』(笠間書院 一九七三年)
- ・新編日本古典文学全集 うつほ物語①～③』(小学館 一九九九年)
- ・『歌物語 伊勢物語・平中物語・大和物語 総合語彙索引』(勉誠社 一九九四年)
- ・『落窪物語総索引』(明治書院 一九六七年)
- ・『平安日記文学 土佐日記・蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記 総合語彙索引(索引篇)』(勉誠社 一九九六年)
- ・『栄花物語 本文と索引 自立語索引篇』(武威野書院 一九八五年)
- ・『後拾遺和歌集総索引』(清文堂 一九七六年)
- ・『金葉和歌集総索引』(清文堂 一九七六年)
- ・『詞花和歌集総索引』(和泉書院 一九八九年)
- ・『岩波古語辞典 机上版』(岩波書店 一九七四年)
- ・『角川古語大辞典』(角川書店 一九八七年)
- ・『古語大辞典』(小学館 一九八三年)
- ・『源氏物語大辞典』(角川学芸出版 二〇一二年)
- ・『うつほ物語大事典』(勉誠出版 二〇一三年)
- ・伊藤慎吾「源氏物語の音楽論」(『源氏物語講座 第五巻 思想と背景』有精堂 一九七一年)
- ・沢田正子「源氏物語の楽の音―女人造型の美意識とのかかわり―」
- ・(『源氏物語の探究 第八輯』風間書房 一九八三年)
- ・中川正美「源氏物語の音楽―宇津保物語の超克―」(『源氏物語の探究 第十二輯』風間書房 一九八七年)

- ・ 小林美和子 「源氏物語の琵琶弹奏」 (『源氏物語の探究 第十四輯』風間書房 一九八九年)
- ・ 中川正美 「「すさび」「すさぶ」考…源氏物語の表現 I」 (『梅花女子大学文化表現学部紀要』梅花女子大学 二〇一六年)
- ・ 中川正美 「源氏物語の歌舞音曲」 (『源氏物語研究集成 第十二卷 源氏物語と王朝文化』風間書房 二〇〇〇年)
- ・ 日向一雅 「源氏物語の貴族生活の美学・理念―光源氏的生活を中心として―」 (『源氏物語研究集成 第十二卷 源氏物語と王朝文化』風間書房 二〇〇〇年)
- ・ 中川正美 「源氏物語の文体と音楽―うつほ物語との比較から―」 (『平安文学と隣接諸学八 王朝文学と音楽』竹林舎 二〇〇九年)
- ・ 星山健 「「音楽」の言葉―『源氏物語』における「調べ・掻き鳴らす・吹く」― (『王朝物語のしぐさとことば』清文堂 二〇〇八年)
- ・ 中川正美 『源氏物語と音楽』 (和泉書院 二〇〇七年)
- ・ 野口元大 「三 「楼の上」の世界」 (『うつほ物語の研究 IV 作品世界の構造』笠間書院 一九七六年)
- ・ 野口元大 「一 音楽理念の主題的発展」 (『うつほ物語の研究 V うつほ物語の音楽』笠間書院 一九七六年)
- ・ 野口元大 「二 音楽芸術的要素の様態」 (『うつほ物語の研究 V うつほ物語の音楽』笠間書院 一九七六年)
- ・ 『源氏物語』における「搔く」と「弾く」――音楽表現に着目して――
 - ・ V うつほ物語の音楽』笠間書院 一九七六年)
 - ・ 日向一雅 「源氏物語―その生活と文化―」 (山田大成堂 二〇〇四年)
 - ・ 清水好子 「源氏物語と音楽」 (『國文學』関西大学国文学会 一九九二年)
 - ・ 井上正 「『源氏物語』の音楽思想―琴と和琴について―」 (『帝京大学文学部教育学科紀要』帝京大学 二〇一二年)
 - ・ 日向一雅 「源氏物語と平安貴族の生活と文化についての研究―貴族の一日の生活について―」 (『明治大学人文学科研究所紀要』明治大学 二〇〇四年)
 - ・ 日向一雅 「源氏物語の音楽―宮中と貴族の生活の中の音楽」 (『源氏物語と音楽 文学・歴史・音楽の接点』青簡舎 二〇一一年)
 - ・ 西本香子 「『うつほ物語』の音楽―天皇家と七絃琴」 (『源氏物語と音楽 文学・歴史・音楽の接点』青簡舎 二〇一一年)
 - ・ 西本香子 「古代日本の王権と音楽 古代祭祀の琴から源氏物語の琴へ」 (高志書院 二〇一八年)
 - ・ 伏見无家 「源氏物語と「琴」 II―余韻の音楽、琴―」 (『人物で読む『源氏物語』第十五巻―女三の宮』勉誠出版 二〇〇六年)
 - ・ (もんだ もゆる・二〇一九年度卒業生)